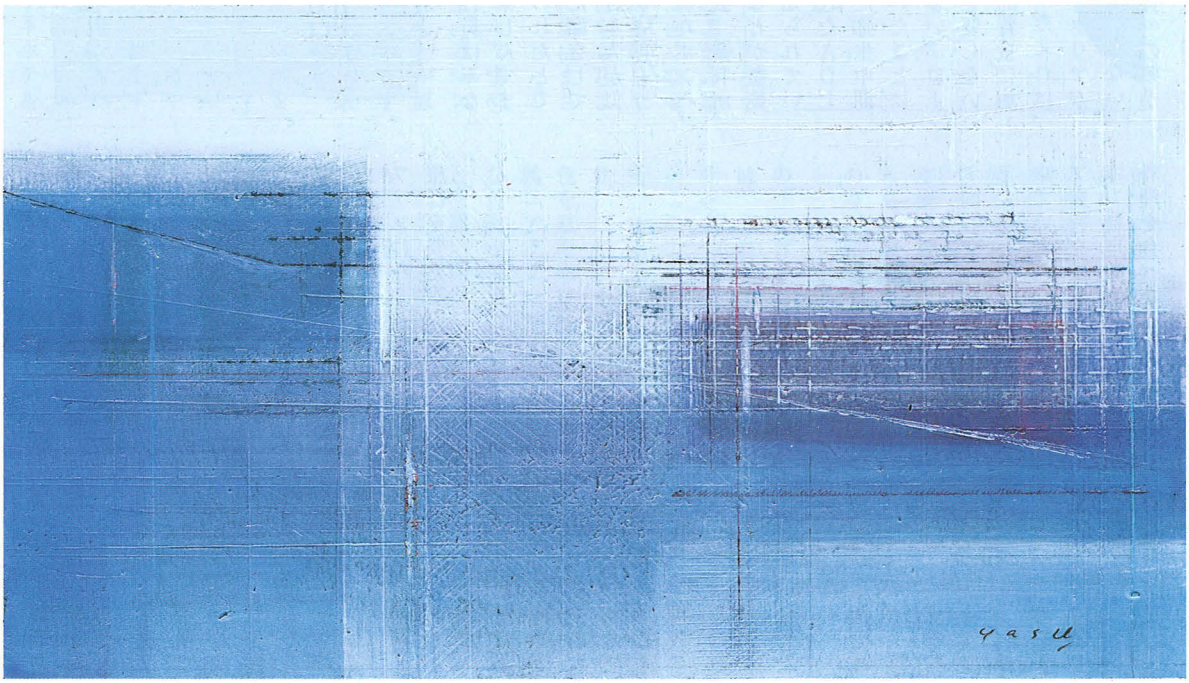
子供から大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を　1997年1月1日発行　［隔月発行］

文化高知

'97年1月　NO.75



「街」　岩合泰治

(財) 高知市文化振興事業団

イタリアと高知

中内　光昭

昨今、イタリアが流行っているらしい。特に若い人々に人気があるようで、大都会ではあちこちでイタリアフェアーの広告を目にするし、少し名の通った〝イタ飯〟の店にはいつも行列ができている。考えてみればイタリアが若い人を引きつけるのは当然で、スパゲッティ、ピザ、ジェラートに始まり、美術、音楽、建築、映画、ファッション、車、バッグ、靴、カメオ、サッカーなど、思いつくままに羅列するだけで納得してしまう。

一昔前は違った。帰国して銀行に行ったところリラの両替はしないという。理由を聞くと、「あんな国の通貨は信用できませんからね」とのことである。イタリアをよほど貧乏な国だと思っているようなので、「イタリアの方が日本よりずっと豊かですよ、イタリアの銀行員はみなひと月ぐらいバカンスを楽しんでますよ」というと、からかわれたとでも思ったのかぶぜんとした顔をしていたが、あの当時多くの日本人が似たような目でイタリアを見ていた。

ベスビオの噴火で埋もれたポンペイの町には上下水道、議会、裁判所、劇場、バー、商品取引所などが整備されていたことは、よく知られている。ただ、あの町が埋もれたAD七十九年当時、我が国はまだ弥生中期と呼ばれる時代を歩んでいたことに気付いていない人は案外多い。ローマの繁栄については語るを要しないだろう。このような歴史的背景に加え〝石の文化〟の重みを考えれば、物質的にも、精神的にもイタリアが豊かであるのは驚くにあたらない。近頃、日本人が〝高度成長〟の夢から覚めて、冷静な心で〝豊かさ〟を考え、GNPでは測れないイタリアの良さを再認識するようになったのは嬉しいことである。

ところで、高知にもイタリアとかかわりを持つ人がかなりいる。イタリアに留学した人、イタリアで料理の修行をした人、現在も彼の地で活躍している人、仕事で往復する人、一度行ってみて、すっかりイタリアファンになった人、そしてイタリア旅行を夢見る人、などなど。

そのような人が集まって「イタリア同好会・高知」をつくってから三年たった。その間、イタリア大使に来ていただいたり、手作りのイタリア旅行を楽しんだり、映画、会話教室、料理教室、さらには、イタリア料理を食べながら、ファッションや音楽の話を聞く会などさまざまな活動を繰り広げてきた。

ただ、国際交流という点からは、交流は一方向に片寄っている。研究交流では、イタリアに行く人が先方からの人にくらべ圧倒的に多いし、観光客の数も同様であろう。もっともっと高知の良さをイタリア人に知ってもらいたい。そろそろ、イタリアに姉妹校や姉妹都市をつくることを考えてもいい頃ではなかろうか。

イタリア、特に南イタリアと高知は陽光と海に象徴される共通のイメージを持っているようである。海産物や細工（サンゴ、カメオ）など産業的にもつながりを持っている。さらに住民の気性にも共通点がある。

姉妹都市の候補として、南イタリアですぐ頭に浮かぶのはナポリである。個人的にもナポリは一番身近な町であるが、残念なことにナポリはすでに鹿児島市の姉妹都市になっていて、鹿児島にはナポリ通りという美しい並木道までできている。さらに、昔から「東洋のナポリ」を自称する熱海もある。あれやこれやで今さら高知が……という気がしてくる。

いかにも高知にふさわしい美しい町をさがすこと、それは決して容易ではないが楽しい仕事ではある。

（なかうちみつあき
（イタリア同好会・高知会長）

水辺を訪ねて

高野　弘

水道の蛇口から当たり前のように出てくる水。その先の水を追いかけ、水中と水辺の旅を続けて早いもので今年で二十一年。その間、四十近い国々を訪ね、水中生物や水辺の風景など、「水」をテーマに撮影を続けてきました。そして昨年十二月には、活動二十周年を記念して、市民フロアにて写真展「アイランド」を、また、その間、高知では初めての講演を「美しき仲間たち」のタイトルで開催しました。

南の島々の魅力の一つは、陸上でも水中でも実に様々な色彩に出合えることにあるでしょう。緑の葉をいっぱいに広げるヤシの木々、色鮮やかな各種トロピカルフラワー、目に眩しい白砂のビーチ、エメラルド・グリーンからダーク・ブルーへと色のトーンを変えるサンゴ礁の海、そして、青く澄んだ空に浮かぶ形の整った白い雲など。また、海面や空を、オレンジやパープル色に飾る朝日や夕日が作り出す光の妙が目を楽しませてくれます。このように島はまさに原色図鑑そのものです。

しかし、島々の中ではゴルフ場やリゾートの開発、水際に生えるマングローブや熱帯樹林の伐採などが原因で島は次第に傷つき始めています。そして、島の色彩も開発に合わせその本来の色が失われて来ています。

水中もしかりです。水際の自然を守り、島の赤土などの流出を防ぐマングローブの伐採が進むと土を含んだ水がそのまま海に流れ込み、魚や小生物の生息場所を損ない始めます。特に赤土の流出がもたらすサンゴへの影響はかなり深刻です。

沖縄本島の、あるリゾートホテル前でのダイビング中、こんなことがありました。その日最初のダイビングの時でした。海にエントリーする直前にかなり激しいスコールが降り始めました。雨の中、水中撮影に専念していると、透視度の高い海中の岸側から赤土混じりの海水の層がこちらに進んできました。そして、その層が頭上を通り沖合に向け移動すると、今度はその赤土が静かに海底のサンゴを覆い始めたのです。ぼくは、このとき赤土の流出がもたらすサンゴへの悪影響を確信しました。

このように島の自然が守られてこそ、海や川の自然が豊かに息づき、サンゴや魚や花たちも本来の美しい色を私たちに見せてくれます。写真展「アイランド」では島の色鮮やかな色彩が将来にわたり、残されることを願い開催しました。

「美しき仲間たち」のタイトルのもと、ラ・ヴィータで写真展初日と最終日の二回開催致しました講演は、高知県では初めての試みでした。ぼくは、講演にギターでの弾き語りを加えています。国内外の水辺での様々な体験談などの講話と、スクリーンに映し出したスライド写真、そして自作の歌を唄いながらメッセージをお伝えしています。話と歌、スライド・ショーを同時に進行する講演のスタイルは、カメラマンの表現方法としてはユニークな試みだと思います。これまでに百三十曲近い歌を作ってきましたが、南の島々での滞在中、島民たちとこれらの曲を、ある時はヤシの木の下で、あるいは桟橋で唄い、親睦を深めてきました。歌は言葉を越えて、心が通じ合う魔法の道具だと思います。これまで、歌はぼくの海外の活動を随分助けてくれました。歌の内容は、海や川、水中での魚との触れ合い、ふるさとの自然や四万十川を歌ったものなど様々ですが、それぞれにぼくの思いがあります。講演では九曲ご披露させていただきましたが、講演の最後を、水中での魚との触れ合いについて作った曲で、今回のタイトルにもなった「美しき仲間たち」で締めくくりました。次はその詞の一部です。歌は良き友であり、今後も是非続けていきたく思っています。

太陽は高く、みなぎるひかり
雲は流れる、大地を越えて
空の下に広くひろがる、紺碧の
海に宿る生命
あなたにも見せてあげたい、
美しき仲間たち

（たかのひろし・水中・水辺
のフォトジャーナリスト
須崎市出身・豊中市在住）

世界にオンリーワン〈2〉

山田裕司

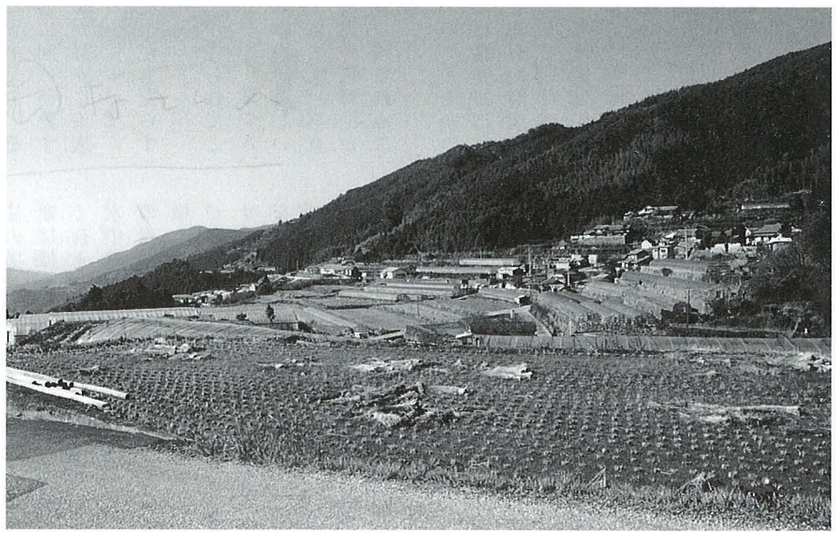
〝今でも、自分の幸せが信じられない時がある。僕はこの美しい光の中にいる。今までの東京での暮らしとは、いったい何だったのだろう？〟

これは、引っ越して来た当時の僕の文章です。現在僕のいる所は、香美郡香北町谷相で、標高約三五〇メートル、緩やかな南斜面の続く地形で、遠くに見える海からの南風とあふれる太陽の光に恵まれた所です。また、おいしい米がたくさんとれ、戦後の食糧難の時には、俳優の笠智衆さん（数年前に他界なされました）が疎開なさっていた所でもあります。

笠さんの本の中にも谷相のことが載っていて、まったく泥棒のいなかった谷相でも、積んであった米が盗まれて村の話題になったこととか、京都の撮影所へ行く時に必ず下げて行ったドブロクがすごく人気があった話などが書かれていて、往時ののどかな様子がしのばれます。

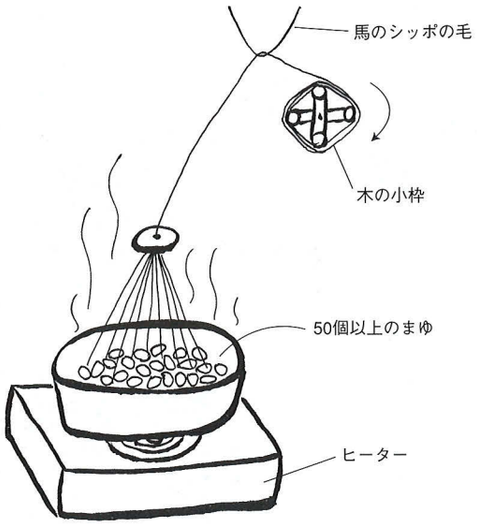
平成四年の三月から、その谷相での生活が始まりました。仕事場の建設が始まるまでの間、手持ち無沙汰の僕は、ある時、土佐山田町の蚕業試験場を訪ねました。以前から、蚕のまゆから自分で糸を引いてみたいと思っていた僕は、試験場に手ごろな機械があると聞きつけて、その見学に行ったのでした。その時応対してくれたのが服部さんで、眼鏡をかけた優しそうな方でした。当時服部さんは農家の副業にと、染織の製品作りを始めたところで、慣れない仕事で苦労している様子でした。

僕の目当ての機械は、当時注目されていた山まゆ（野生の緑色のまゆ）の糸を引くための機械で、小型のバスと加熱器と小さなモーターの付いた、ごく単純な物でした。でもそのシンプルなところが気に入って、「ぜひ一度この機械で、糸を引いてみたいのですが！」という僕の言葉に、快く承諾して下さって、そのためのまゆの手配までしていただきました。そのかわりと言っては変ですが、僕も「染織で分からないことは、何でも協力します」ということで、その時から二人の協力関係は始まりました。



ぼくのいる香美郡香北町谷相

絹糸作りは始めてでしたが、どうせやるなら、普通とは違う方法で、しかも最高の品質が出来る可能性を試すべきと、結局選んだやり方は、古代的手法でした。それは約五〇個のまゆから一度に糸を作る方法で、中間点では馬のシッポの毛で糸をしごいて、ひとまとめにするやり方でした。ところが、ここで一つの問題がありました。どこで馬のシッポの毛を手に入れたらいいのかということでした。おそらく昔だったら、農耕に馬を使っていたから、近所の馬のシッポの毛をいただいてくればいいのですが……。しばらく考えて、高知競馬場に電話して、お願いしてみたのですが、「大切な馬のシッポの毛をわけることは出来ない」との返事でした。きっと電話の向こうでは、変なことを言う人がいるもんだ！などと言っているのだろうなあ、と思いながら受話器を置きました。それでもくじけないのが自分のいい所と、次は乗馬クラブに的を絞りました。でも、いきなり電話するのは得策ではないと思い、知人に相談すると、「友達の獣医さんが土佐山田で乗馬クラブもやっているので、電話しといてあげるから行ってみなさい」と言ってくれました。さっそく出かけて事情を話した所、快く、バッサリと切っていただけました。今思い出しても、あの時は本当に嬉しかったです！



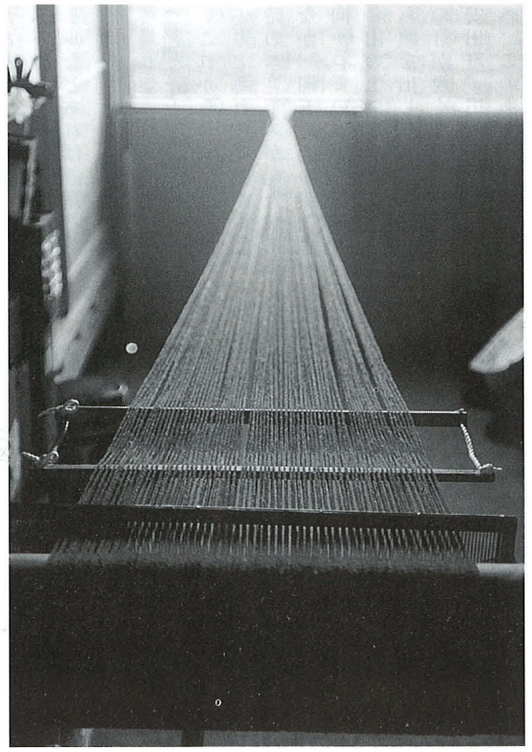
そんなこんなして出来た糸は、絹本来の、上品なつやと軽さと温かさを兼ねそなえたものでした。もっとも、初めての手習いで、それで織物を作る程の量は出来なくて、翌年も仕事場の道具を改良して、糸を引き、ようやく着物二反を織りあげました。

出来上がった着物は、いろいろな方々から高い評価を得ることが出来ましたが、僕の目指した織物とは成り得ず、改めて、現在の蚕品種の限界を思い知る結果となりました。

やはり、理想の絹織物を追求するなら、日本古来の品種しかない！　どうしたら、その研究が出来るだろうか？　どうやったら、〝小石丸〟を手に入れることが出来るのだろうか？　絹の研究をすると必ず出てくる問題に、またも突き当たってしまいました。

実はこれには深い訳があって、日本では国が決めた品種以外は飼ってはいけないという法律があり、以前、柳先生が、皇室から分けていただいた小石丸を八丈島で飼育した時でさえも、農水省の役人に無残にも焼き払われてしまったという事件があったからです（ちなみに皇居の中は、治外法権らしいのです）。

そのような過去の経過があったので、今の日本では、小石丸の研究はしょせん無理なことと、あきらめに近い気持ちでした。



織物のタテ糸を巻くところ

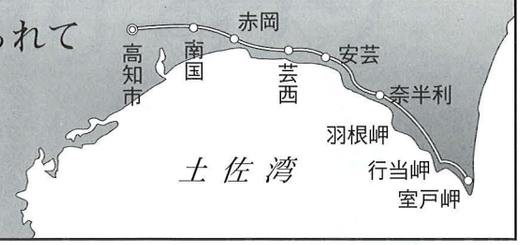
高知へ移住してから丸三年になろうとしていた平成七年の初めのこと、今年こそは蚕の飼育をしてみようと思って、服部さんと打ち合わせをしていた時、「どうせ飼うなら小石丸でやってみたい！」と言った僕の耳に、「小石丸の種も研究用に取り寄せられないこともないんです」と言った服部さんの言葉が、まるで落雷のように轟き、僕の頭の中を駆け巡りました。

（やまだゆうじ・染織家）

「室戸貫歩」完歩の記

若者たちのドラマに魅せられて

小林　英治



高知大学恒例の「室戸貫歩」に一昨年初めて参加してみようと決意したが、周囲の眼は冷たかった。「とても無理だ」「大丈夫ですか、止したほうがよい」などの声。しかし無事ゴールにたどり着くことが出来た感激は忘れがたい。

二回目の今回は余裕が出てきた。当日（十一月二十三日）午前九時、朝倉の大学正門前を埋めた一団が賑やかに出発、一路九十キロ先の室戸岬を目指す。道着姿の空手部をはじめ、柔道部、合気道部、ソフトテニス部などの学生たちが続く。

南国市のソバの花や柿の実などを愛でながらの道中は、柔らかい日差しを浴びて汗ばむほどだ。どろめ祭りの際来たことのある赤岡町から先は太平洋の海原を眺めながら歩を運ぶ。途中から整備されたサイクリング道に入る。部やサークルから参加した学生たちが多いなかで、自主参加という理学部の男子三人組や男女のペアが楽しそうに歩いている。

かつてゼミの合宿で来たことのある芸西村を通って、安芸市に近づくころには、曇りがちの空を夕日がほのかに染めていた。午後四時半安芸市の球場前に到着。ここまで約四十キロ、時速五キロを超える予想外の早いペースに安心した。

ある部の学生は、ここで「サポート隊による豚汁と握り飯の差し入れがあります」と話していた。私はレストランに入り一人夕食をとる。ビールなどあれば最高だが前途のことを考えると自粛せざるを得ない。

意気揚々と出発

〈夜道をとぼとぼと〉

これからいよいよ後半。日はとっぷりと暮れて空気が冷たい。午後七時のニュースが「天候にめぐまれたなか、四五〇人の参加者が室戸岬に向かっています」と報じていた。

山の上には満月に近い月が雲間から顔を出した。遠くに羽根岬の灯台の灯が鋭く点滅しているのが見える。安田町、田野町を通過して奈半利町へ。このあたり独特の瓦屋根が美しく光っている。散歩していた土地の人は「若者たちが町を出ていって人口減に悩んでいます。県交通のバスの事務所が廃止になりました」と言っていた。国道沿いのパチンコ店の明かりのみまぶしい。

車のライトや懐中電灯を頼りに足を前へ前へと運ぶ。ときどきサークルのサポート隊の車が道ばたに止まり、仲間を探している。各サークルとも部員を動員して支援活動に余念がなく、仲間を励まし食料や飲み物の手配、負傷者の手当てと忙しい。

背中のザックが重くなってきた。サポートなしの当方は、シェルパのいないヒマラヤ無酸素登山のようなものだ。しかしこれこそ本当の「体力と精神力の限界に挑戦する」（空手部のチラシより）ことと自己満足。

夜更けて国道を行き交う車の数が減り、出発のときあれほどいた参加者も間隔があいて見当たらず、ただ一人ひたすら歩き続ける。道路沿いの民家はすでに明かりを消して静まり返っている。足に出来たマメがつぶれて、歩を運ぶたびに痛い。潮騒の音、それにウォークマンが唯一の友だ。前年は満天の星空だったが、ことしは月が美しい。

やっと羽根岬に着いたのは午後十時。ここは安芸市と室戸岬のほぼ中間点にあたり、全行程の四分の三を踏破したことになる。

ひと息ついて再び歩き始める。こんな真夜中でも大きなトラックが木材などの積み荷を満載して国道を突っぱしって行く。前を女子学生が一人で歩いている。私のゼミの学生で、いっしょだったサークルの仲間が先に行ってしまったとのこと。彼女足が痛くなってきたと片足を引きずっている。「先生は何ともないですか」と聞くので、教師たるもの弱みは見せられず、大丈夫と見栄をはる。

〈力を振り絞って〉

吉良川町を経て午前零時半行当岬到着。室戸岬灯台の明かりが見え、終着点は間近い。しかし足が重くザックが肩に食いこむ。道ばたで学生が一人、二人とうずくまっているのに出くわす。「どうした」と声をかけると「マメが痛くて歩けません」という。「最後だからがんばれ」と励ます。

海亀の産卵地として知られる浜辺を通過し、室戸市街に入る。犬の遠吠えの聞こえる街は静まり返っていて、漁港につながれた船にも人影がない。空は晴れ渡り月が明るく照っている。最後の力を振り絞ってゴールへと向かう。

柔道着の学生が走って追い抜いていく。この場に及んで大変なスタミナだ。岬の上の灯台の光が目に入るが、一向に近づかないもどかしさ。

「もう歩けません」

ついに中岡慎太郎の像に出て、午前二時五十一分ゴールイン。昨年よりも二時間早く、十八時間を切ったのは上出来だった。途中でへばっていた仲間たちも次々に到着する。疲れと感激から口を聞けない女子学生や上気した顔の猛者たち。夜を徹して国道に繰り広げられた若者たちのドラマのフィナーレだった。

完歩者三四九名中、私は三八番目だった。昨年のトップは女子学生だったが、今年は立川学長が開会式で男子学生に奮起を促した効果があってか、見事男子ＯＢが午後五時二五分に栄冠のゴールを果たした。私がまだ半分の道のりのとき、全行程を走り抜ける韋駄天ぶりには恐れ入る。

教室で接する学生たちと異なり、たくましく完歩した彼らを見直した。最後の苦しい時互いに助け合い、痛い足を引きずりながらゴールを目指す若者たちの姿は感動的であった。

実は貫歩に参加しようと決めてからの三カ月間、私は毎日努めて歩き準備に万全を期した。高知県の高峰三嶺や近くの鷲尾山に登り「高地トレーニング」にも精を出した。備えあれば憂いなし、九十キロの道のりも恐れることはない。

美しい晩秋の土佐路を自分の足で歩いてみて、沿道の市町村が工夫をこらした街づくりに励んでいる姿を見ることができたのは大きな収穫だった。車で通り過ぎるだけではわからないすばらしい道と風景だ。

それに何よりもうれしかったのは沿道の人たちの声援だった。室戸市のかまぼこ屋さんは昨年に続いて、ゴール近くで温かいうどんのサービスをしてくださった。皆さんに支えられて歩き通すことが出来た貫歩だった。

無事ゴールして（中央が筆者）

（こばやしえいじ
高知大学人文学部教授）

四回目を収穫
―素人の米づくり―

永吉　二支

「大野見田んた組合」は、米づくりに挑戦している素人のグループ。本職は看護婦や事務員、検査技師や大工さん、看板製作や元教師で画家、あるいは主婦等雑多。耕作地は四万十川源流の大野見村、六世帯三反歩でスタートして現在九世帯五反歩を耕作するまでになっている。これは、メンバーのひとりである永吉さんの農事レポートである。

〈五年前の十二月〉

「ねえ、あんたらぁ、お米代は一年どればぁいりゆう?」

「さあ、八万から十万近うなりゃあせんろうかねえ」

「たんぼを貸してくれて、水を見てくれて、米づくりもちゃんと教えてくれるが、一緒に作ってみん?」

知り合いの田中さんとのそんな会話がきっかけだった。たんぼは大野見だという。幹線道路からはずれた大野見村は、地図でしか知らない土地だった。車で二時間近くかかる山の中に、広い土地が穏やかな初冬の日差しの中にあった。貸してくださる田は、三反ほど。前年まで作っていた方が病気で作れなくなった。減反政策に乗れば、転作助成補助金は下りるが、一年放ったらもう稲は作れなくなる。ぜひ誰かに続けて作ってもらいたい……と。

静かな古い神社の森、田の前をゆったり流れている四万十川の源流。前後の山から小鳥の声。

田仕事のしんどさ、大変さを知らないわたしたち五家族は、このムードにすっかりその気になってしまった。かくして、土日曜百姓をすることになった。

〈年明けの三月〉

朝は五時起き。格好だけは農家の人になる。高知市を六時に出発。八時から仕事開始。教わった最初の仕事は、芹(せり)抜きだった。

「イヤーきれいな芹。御浸しにしたらおいしい」「天ぷらもええ」などというはしゃぎ声は、お昼近くになっても減りそうにない芹に、しだいに弱まり、最後には無言になっていた。

「もうええろう?」「いかん。芹があったら稲を冷やすと。全部とっちょかんといかん」「除草剤を絶対使いとうないがやったら、来週も来て芹を引かんといかん」

ビニールの袋にいくつも取った芹は、「もったいないねえ」「高知へ持って帰ったら売れるにねえ」といいながら捨てた。

〈五月・田植え〉

村の田役にも出て、大事な水の道の掃除をし、村の人達にも励まされた。あぜ草を焼いて、あぜ切り、裏出しの作業におぼつかない鍬を使った。機械に代かきまでの作業をしてもらって、水田になった田に跡付け(稲を植える位置を決める)をして、五月中旬いよいよ田植えが二日間にわたって行われた。

「まっすぐ植えんと、田の草を取るときフネが通らんよ」「跡付けがわからん」「まっすぐ引いてない」「濁って見えん」「ここは抜かしていちゅう」「深植えにした」「稲が浮きゆう」「いもりがおる!」「へびがきた!」「虫が蛙に食べられゆう」「この虫なに?」と騒がしいこと。さらに子どもがどうしたこうした、孫がこういうたああいうた、はては学校問題から社会情勢にまで及ぶ話題でとてもにぎやかな仲間たち。

一日目の夜は『四万十源流の家』に泊まる。食事は自炊。二日目の仕事にさしつかえない程度に盛り上がる。翌日は少し頼りなくなった足腰をなだめつつ、昨日の残りを植え、お弁当を神社の境内で食べる。この神社は本当にありがたい。みんなの駐車場であり、食堂であり、談話室でもある。昨年、森の木が少し切られて社殿が改装され、美しいトイレまでできた。ここで地元の相談役の岡村さんにも加わってもらい、これからのくわしい作業日程が相談される。ほぼ全員参加の田植え二日目は早く終わる。

みんなの駐車場であり、食堂であり、談話室でもある神社の境内

〈六月・草取り蛍狩り〉

田の草取りを三回、主にヒエとウマバリだが、除草剤を使わないので、抜いても抜いてもすぐ生えてくる。本業の忙しい人が多くてなかなか集まれない。少し手を抜くと、草で田が真っ青に光り出す。そうなれば、仕事もはかどらない。草の勢力はますます強くなる。もうイモリも怖くなくなったし、蛇も見たぐらいでは驚かなくなった。小さい虫も無視することができるようになった。

こんなある日、田から上がって溝で足を洗っていると、地元の人と間違えられて道を聞かれたこともあった。地元の人は、「あんたらあえらいねえ。わたしらぁ、もう何年も田を這うて草取りしたことないぞね」といって懐かしがってくれる。俄か百姓の私たちは、このきれいな源流の田を農薬で汚してたまるか!　このしつこい草が、薬を撒いたら生えてこないのは気持ちが悪い!と思っている。しんどいけれどそれだけは譲れない仲間たちは、「草がちゃんと取れんようじゃったら薬をまくかね?」とおどかされ、ブヨに食われても三度四度と草取りに通う。こんな六月の中旬、おまけの楽しみは蛍狩り。四万十川の曲がりに沿って川の上を一面蛍が飛ぶ。一度は、本当に川が金色の帯のように輝く夢のような蛍の群れを見た。

〈夏の草刈りそして稲刈り〉

畦の草も伸びてくる暑い夏の日。今度は草刈りにいく。枝豆を植えた年もあったが、これは草刈りの仕事をややこしくするだけだった。草刈りがすめば、台風が来ない限り、後は稲刈りを待つだけ。あの大凶作の四年前、我らがたんぼの稲もかやって、台風の後の暑い日、三～四株を起こしては括(くく)っていく作業をした。その後、手刈りをした稲を危なっかしい稲架にかけ、一カ月乾燥してやっとお米になるという手間のかかることに挑戦したが、おかげで米騒動のあの年、外米のお世話になることはなかった。しかし次の年、指導者から、「台風が来たときに保証できないから、もう稲架に架けるのはやめてくれ」といわれた。

以後鎌を使うのはコンバインのお手伝いだけになっているが、さすが機械!あっという間に済んでしまう。この稲刈りの間中、田んぼの上を飛ぶとんぼの群れは、ほかのどの田にも見られない。コンバインに追い立てられて真ん中に集まった虫たちの群れが最後の稲列を失うときは、祝豊作!の花火のようだ。

四年目の昨年は猪の訪問もあったりして、とにかく何度も田んぼに通うことになったが、稲はよくできた。交通費やその他諸々の費用を考えると日本で一番高い米を食べているのかもしれないけれど、この喜び、幸せはなにものにも替えがたい。なにも、外国から輸入した米を食べさせるために、減反を奨励することはないと思う。こんな農作業も参加者に多少の出入りはあったが、田んぼも五反近くに増え、総勢十五名、四回目を収穫した。とにかく本当においしい。

また今年もつくろう。

(ながよしふじ)

手刈りした稲を稲架にかけているところ

語り継ぐ――（上）

堀内　豊

1969年・大野武夫と筆者

のっけから変なことを言うようだが、百人の死には百人の死に方がある。死者に百人のつながりがあるなら、個別的に百の追懐があるだろう。

私のその人に寄せる追懐は、日々清新で、以前に増して追想の色あいが濃くなってきた。それはいまの私が、その人より少し年嵩になったからかもしれない。

顧みると、わずか七年だけの付き合いだったが、ずいぶんと〝心の資糧〟を頂いて、教えられることが多々あった。たしかに私にとってその人は別格の存在であった。と、しみじみと思うきょうこのごろである。

その人とは、自称便利屋の大野武夫さん（社会事業家）のことである。

豪放磊落で、先見性と行動力のあった大野武夫さんを〝語り継ぐ〟には、どこから手を染めていいかわからないほど複雑多岐にわたっている。ここはやはり思いついたことから書いたらいいかもしれない。たとえ順序がちぐはぐになったとしても。

◇

昭和四十三年二月（一九六九）から書きはじめる。（その年は、

たまたま坂本龍馬の銅像建設から四十年経っていた）

――さる団体からたのまれて、事業内容と業績を紹介するパンフレットを制作することになった。表紙のレイアウトをまず考えた。（坂本龍馬の銅像を被写体にしよう……）

さっそく銅像の正面に、高サ十五メートルの足場を組んだ。畑山裕紀さん（高知市宝町在住）に撮影をお願いすることにした。

畑山さんは、「朝の八時まえに足場の頂点に立たせてください。朝日の光で龍馬の顔が、刻々、微妙な陰翳をかもしだされますので……」と、おっしゃるので、そのように取り運ぶことにした。

当日は絶好の撮影日和で、畑山さんは十五メートルの台上に立ち、一時間以上もつめたい浜風に吹きさらされて、龍馬像と対峙してくれた。

みごとに撮り終えると、私はそれを縦一メートル二〇。横二メートル三〇に引き伸ばしてもらうことにした。

一カ月ほどして、畑山さんの労作は仕上がった。額装にしたそれを、県農協会館（いまのJA高知ビル）六階くれないルームの壁面に飾りつけて、西町の大野武夫さんに連絡してあとで視てもらうことにした。

翌日の昼すぎ。

「ここの親分が、坂本龍馬に対面してくれと言ってきたから……」

と、大野武夫さんが受付嬢に言っているのが聞こえた。私が出ていくと大野さんが、ゆっくりした足どりで（中風の後遺症）、ゴールデン・バットをくゆらせながらやってきた。すぐにくれないルームに案内した。

大野さんは、唇をかんでじっくり作品を視ていた。

「だいぶ骨折れたでしょう。掛け値なしに言うと、上々の出来映えや。このアングルで坂本龍馬を撮ったのは、これが最初だから本邦初公開ということになる――」

あとは独りごとを言うように、

「まあ、人の度胆をぬくようなことを、ごく当たり前に思ってやった見本がこれかもしれん。そういうとちと褒めすぎかな」

と、つぶやいたのを思い出す。

このときの大野さんは、四十年前に体験した龍馬銅像建設の難事を、感慨ぶかく憶い起こしていたような風情だった。

そして、私のほうをふり向いて、

「ところで、こんなものを持ってきた。あとで読んでみて」

と、表紙がセピア色に褪せた本を手渡してくれた。昭和三年八月（一九二八）発行の高知県連合青年団々報第十一号。『銅像建設記念坂本龍馬先生号』であった。

全七十二ページに、除幕式の状況。祝辞。感想。建設寄付金一覧表。建設日誌。坂本龍馬略伝。収支計算書などを収載している。

この軽装の稀覯本を読んだあと、これは〈大野武夫の青春のモニュメント〉で、大野さんの人生観と人間性が凝縮している、と思った。

◇

ところで、去年二月に急逝した司馬遼太郎氏が、「坂本龍馬生誕一五〇周年記念」で昭和六十年八月（一九八五）に来高したときの講演で、

「高知の青年たちがタバコ一箱分のお金を集めて、ようやくできあがった美事な作品です」

と語った。なるほど龍馬銅像の建設者名は、「高知県青年」となっている。なぜ高知県青年としたか。そのいきさつを記すと、「坂本先生銅像建設会」の有志が集まっていろんな論議をし、さて建設者名を決めるときに、入交好保氏が口火を切った。

「……野村茂久馬会長（野村組を統率し、〝土佐の交通王〟と言われた傑物）と、歌川、安原両副会長。それに最初の呼びかけ人のわれわれの名前を、〝建設者〟にしたらどうだろうか」

と意見を述べると、すかさず大野武夫さんは、やんわりと入交案をしりぞけて、次のように発言した。

「個人名を刻んだら、龍馬先生に嗤われる。県下の青年が我を忘れてとりかかった大事業だったから、これはどうしても〝高知県青年これを建てる〟にしないと理屈に合わない。ここはやはり、〈無私の心〉に徹しようではありませんか」

と、一気にしゃべった。これには誰も異論はなく、建設者は「高知県青年」に決定したという。

この一事からでもわかるように、およそ大野武夫さんの発想は、〝個体〟より〝全体〟に比重を置き、いつもそれの効用を考えて実行した。

いわばそれが大野さんの編みだした、生き方の流儀であった。

（つづく）

（ほりうちゆたか・高知県地方職業安定審議会委員）

何かを探して

木村美恵子

どうして小説を書き始めたのか、と聞かれることがある。本当のところ私は文章を書くことは好きではない。手紙もはがきもほとんど書かない。小学生のころの作文の時間も、宿題が出た時も、私は、と書いただけで後が続かず白紙のまま先生に提出した。

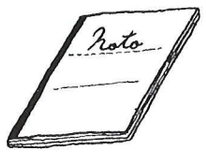
父に死に別れ、中学二年生の時に次兄に連れられて尼崎市の中学校へ転校した。大学生の次兄が下宿している男ばかりの下宿屋の若夫婦の部屋へ、住み込みの子守という条件で、私は置いてもらった。朝五時から学校へ行くまでと、学校から帰ってから夜の九時すぎまで、赤ちゃんの子守をした。奥さまは二十人ほどの下宿人の朝食と夕食を一人でまかなっていた。旦那さまはサラリーマンで朝はやくから大阪へ通勤していた。

奥さまも旦那さまも下宿人のひとたちもみんな良い人で、田舎者の私は可愛がってもらった。まだ十四歳の私は何も気が利かず、まわりのひとたちに迷惑をかけたと思う。みんなに可愛がってはもらったけれど、赤ちゃんを抱き続ける腕は重く辛かった。

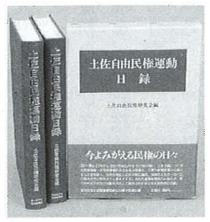
転入した立花中学校はマンモス校で、戦後のベビーブームに生まれた私たちの学年は七百数十名で、全校生は二千名ほどいた。運動場の中を川が流れていて、高知の山奥で育った私は度胆を抜かれた。

他人の飯を食べる辛さをあじわったせいかどうか、夏休みの宿題で生まれて初めて書いた作文が学校の文芸誌に掲載された。それは父が事故死する前に最後に会った時のことを書いたように思う。

そのころから私は気が向いた時に大学ノートに日記を付け始めた。大学生の次兄は家庭教師のアルバイトで帰りが遅く、話相手のいない私は大学ノートを相手に話しかけた。



高知市文化振興事業団創立10周年記念出版
土佐自由民権運動
日　録



土佐自由民権研究会編
B5判・上製本・函入り　496頁
定価 10,000 円（税込み）

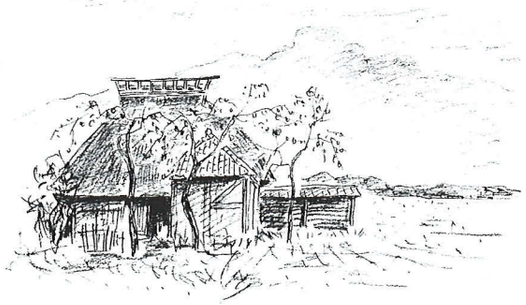
「国際化」時代の
山村・農林業問題
再建への模索・高知県からの報告

高知県緑の環境会議山村研究会
鈴木文熹・依光良三・川田勲・飯国芳明 著
A５判・上製本・288頁　定価 2,000円（本体 1,942円）

長兄が病死して、私は尼崎北高校から高知県立窪川高校二年生へ転校して、母のもとへ帰って来た。母との生活はその時が初めてだった。

窪川高校生の時に、夏休みに書いた宿題の作文も何故か学校の文芸誌に掲載された。私は美術部や社会科学研究部に入部していて、小説は読んでも、書いたりしようと思ったことはなかった。

尊敬していた先輩から「僕は作家になりたい」と聞かされた時も、遠い世界のことのように思った。



ただ、尼崎のころから気が向いた時に付け始めた大学ノートの日記は、破ったり、燃やしたりしながらも続いていた。

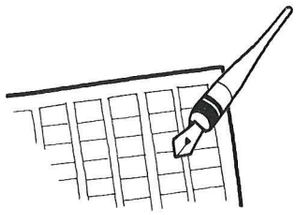
私は明るい、活発、陽気、でしゃばり、やかましい、おせっかいやき、かかりがましい、社交的という評価を受けることがある。しかし、自分では心の底にどうしようもない空洞を抱えているように思う。私はその空洞から逃げるために、空想をした。幼いころから寝付きの悪い私は父の眠っている横で、漫画や小説で読んだ主人公になったり、自分が万能の女性になって、日本全国、世界中を旅する物語を夢みた。最後には必ず、素敵な王子さまが登場する。

空想と現実とはかけ離れているのは当然のことで、私は二十三歳の時に普通の人と結婚した。

子供もふたり生まれて、夫の仕事も順調で、家族全員が健康で、幸せなはずなのに何故か心が虚しかった。このままこうして十年二十年三十年と歳をとって老いてゆくのがいやだった。何か人生に忘れ物をしているような気がした。その何かを求めて高知文学学校へ入校した。二十八歳の時だった。

文学学校がまだ高知城のもとにあった旧公民館でやっていたころで、高校卒業以来はじめて授業をうけた。あんなに勉強がきらいだったのに、机に座って授業をうけている自分が嬉しかった。探し求めている何かが見つかりそうな気がした。

文学学校では高知文学という文集を研究科生が毎年発行していた。年に一度だけ締め切りがあった。文章を書くのはきらいだったけれど、自分に鞭打って書いた。作品集が出ると、文学学校の先生や先輩、仲間が批評してくれる。来年こそは、今度こそは、と思って書いた。きっと、きっとほめられる日を夢みて。先生や先輩や仲間がいたから書いてこれたように思う。



（きむらみえこ
椋庵文学賞受賞作家）

■ 新　刊 ■

清流を子らへ
——21世紀に残したい鏡川——
高知河川環境研究会編　A5判・並製本122頁・定価1,030円
時代とともに急速にその姿をかえる鏡川。その変貌ぶりを憂い、何とか清流を復活させ次代の子どもたちに残したいと研究会メンバーがおくる熱いメッセージ。
※市内主要書店、又は当事業団でお求め下さい。

お稲荷様界隈 3

久武　盛真

父の退職の少し前に、母はツテで銀行へ就職しました。土佐橋際の銀行も身元調べは厳しいから、保証人は町内の常盤酒林の公文さんに頼みました。公文さんは絶海のご出身で教員から醸造家になって成功した方です。

常盤酒林には兄雄吉の学友公さんがいました。彼は旧制土佐中学の七期生です。三根円次郎校長先生の薫陶下に自学自習に徹して励んだ人で、今では公文教育研究会の会長さんです。

話は前後しますが、昭和八年頃西洋音楽の鑑賞会が流行りました。小学校で唱歌しか習わずスコアなんか見た事もないくせに、かぶれた連中が堀詰の細井レコード店を根城に熱中していました。当時楽器と言えばハーモニカか大正琴程度で、チェロを抱えて頑張っていたのは元市長の大野勇さんのご舎弟の五男さんだけでした。細井さんも、同世代でゲルピンで針しか買わない連中に、商売気抜きでレコードや会場を提供する熱心なパトロンでした。

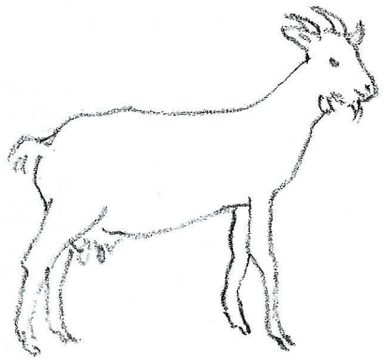
バッハのブランデンブルク協奏曲を聞いた戻りに公さんは私を顧みて「どうぜよ。判るかよ」と尋ねました。私が「楽譜も知らんに判るかよ。公やんは判るかよ」と問い返すと「判ってたまるか。けんど判らん言うたらワヤにされるきに判ったそうをしよるがよや。お主も人前で滅多なことは言われんぞ」と言うのです。この大胆不敵な一言には、後年大成功を遂げた彼の物の見方考え方の片鱗が隠されている様な気がします。一九九一年刊のくもん出版の彼の自伝『やってみよう』には、成功に到る迄の逸話が要領良く書いてありますので詳しくはそっちに譲ります。

銀行はもとの土佐橋から移転と合併を繰り返して、はりまや橋に落ち着きました。勤勉無比の母は電車にも乗らず、降っても照ってもつんのめるような前傾姿勢で急ぎ足に往復しました。この速歩通勤が後年八十八歳の長寿を支えたと思います。女性の社会進出はまだ珍しくて職業婦人という新語が出来ました。

父の退職の影響はもう一つありました。緑町の末永さんに貸してあった鳥居前の煙草・塩・切手・食品雑貨の小店を返してもらう話がまとまりました。今なら営業権だの生活権だのとうるさい事になりますが、末永さんはお人柄で、すんなり応じてくれました。その頃は米騒動の後で、大学を出ても勤め先がない就職難の真っ最中です。買いたくてもお金のない人ばかりでさっぱり売れず、貸せば踏み倒される。末永さんは現金居抜きの条件に納得したのでしょう。雑貨店は還暦の祖母を店番にして一応軌道に乗りました。

母親に若死にされた家付き娘の祖母の料理は、栄養学的にも技術的にも縄文時代さながらの煮るか焼くかです。そのうえ、大骨はおろか小骨の末まで丁寧に取り除き、焼いたスルメの灰まで水で洗うためか、ご本人は、栄養障害で四十歳から総入れ歯、家族は皆小柄でした。クレゾール抜きで何処もかしこも拭きまくる祖母の癇性癖は、拭けば拭くほど汚染するのに何度も私を捕まえては着物の上から尻を拭きました。後年言語障害の矯正に頓着しなかった私は、己が拭き癖を生涯貫いた祖母の紛うかたなき直系です。

父は店の用心棒を兼ねて、日当りのよい店の奥の小部屋で養生しました。緑町の竹中先生が往診にきます。



野草を乳にかえる山羊

竹中先生は内科、外科、小児科、産婦人科、耳鼻科、眼科その他の万病と、犬猫の治療にも明るい登山ナイフそこのけの貴重な存在で、弟の信平も重い中耳炎を助けて戴いた神の如き名医でした。登山ナイフは、刃物は勿論コルク抜き・缶切り・錐や鑢など七つ道具を具えた万能ナイフです。

国保のない時代に大黒柱が倒れたら絶体絶命です。先生は医療費の節約を認めれば、只の野草を乳に変換する山羊を斡旋して栄養の向上を促したり、漢方薬や灸点を教える親切を持ち合わせた、今はもう何処を探しても見当らなくなった献身的な仁術家でした。

コーヒーメーカーや食器乾燥機など阿呆の一つ覚えの台所用品が今幾つ出回っているかご存じですか。こんな道具に居場所を奪われた連中は、部屋の狭い隙間で肩身の狭い思いをじっと我慢しています。そこへいくと登山用万能ナイフは重宝です。何もアルミの洗面器で煮炊きをせよと迄は言いませんが、阿呆の一つ覚えの道具を使いたがるのは愚劣です。

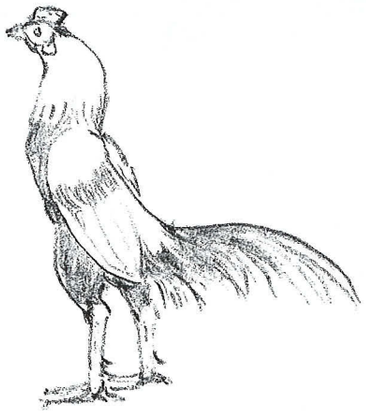
肥後の守は至極簡単な構造の万能ナイフです。私は肥後の守さえあれば楊子会社の原料を無断で失敬して独楽やチャンバラ用の刀に加工したり、よその竹垣で竹トンボや杉鉄砲などを自給しました。私は拾った小さな砥石のかけらを携帯して、暇さえあれば肥後の守を研いで仲間と切れ味を競いました。その頃定額灯がついて私はランプのホヤ磨きを免ぜられ、祖母は夜更かしを更に延長しました。

退屈な四十歳の病人は釣りをします。川の上へ一メートルもはみ出して建てられた店の裏窓から、副食用のニロギや、スミヒキ、チヌなどを優雅に釣るのです。

ミミズ掘りは私の担当です。緑町の三宅さんのゴミ捨て場が秘密のミミズの宝庫です。桃、柿、びわ、ザボンなど思い出多い果樹が九本もある三宅さんには、季節ごとに散々ご迷惑をかけた上に、三宅さんの寵愛する軍鶏を釣り竿で釣った覚えがあります。啼きもせずに首を差しのべて、引っ張る通りついてくる軍鶏は可愛いものです。捕まえられた時「恩を仇で返す」という言葉を教えて下さったのも三宅さんでした。罪滅ぼしに鼻歌混じりで夏休み中蛙を軍鶏に仕送り続けました。

家が貧しいとチマチマした子になるそうですが私がその典型です。鰯が大漁だった日に肥後の守で背開きの干物に挑む私の所作を見た父は、傍らの母を顧みて「この子は妙に小卑しいのう」と言いました。選りに選って魚屋風情の真似をする小倅は何たる不心得者かと嘆いたのです。その一言で私は八十一歳になるまで深く傷付きました。親は子供の前では滅多な事を言ってはなりません。

（ひさたけせいま・泉文芸主宰）



釣られた軍鶏

県内考古事情

土佐考古通信（2）

山本　哲也

まほろばの古代寺院跡

南国市北部の国分川周辺地域では比江廃寺跡・土佐国分寺跡・野中廃寺跡などの古代寺院跡が所在する。これらの寺院跡は、土佐の古代史を紐解くうえで重要な位置を担っている。最近の調査成果から、様相にふれることにしたい。

「比江廃寺塔跡」として国の史跡に指定されている南国市比江の比江廃寺跡は、白鳳時代後期（七世紀後半～八世紀前半）に創建された寺で塔心礎（塔の中心柱を支える礎石）が遺存している。昭和十七年に塔跡東側から多量の瓦類が出土し、また四十四年の学術調査で、塔心礎は創建時の位置のままである事などが確認されていた。

平成元・二年に、塔跡東側の工場跡地について確認調査が行われ、続けて平成六・七年には塔跡及び周辺部について寺院跡の内容確認のための学術調査が行われた。

その結果、塔跡東側では金堂跡の存在を示す遺構等は検出されなかったが、塔跡北東部の調査区から南北方向の溝跡が、北西の田地に設定した調査区では礎石建物跡・掘立柱建物跡などが検出され、寺院跡関連遺構の存在が始めて確認された。また、塔跡の調査では、塔心礎は原位置を保っていることが再確認されると共に、塔心礎の据え付け痕（掘込地業）が検出された。この地業痕の版築土のなかには、瓦片・土器片が含まれており、出土遺物から塔の建立は八世紀前半にかけて行われたことがうかがわれる。また、周辺から検出された建物跡等についても、ほぼ同時期に形成された遺構であると推察される。

このように、比江廃寺跡については寺院跡に関連した具体的な遺構が確認されつつあり、これまで法隆寺式伽藍配置（塔の東側に金堂を配する構成。）と考えられてきた同寺院跡の内容について、再検討を図る必要性が生じてきた。従来、建立の契機としては、地域豪族の氏寺として捉える見方が有力であったが、隣接する国府跡の存在を視点に加えて、新たに地方の律令機構の整備のなかで土佐国府に付随した守護寺、いわゆる国府寺として成立したことも検討されるかと考える。建物跡の存在が確認された調査区の西側には、さらに遺構等の存在が有望視され、今後の調査成果が期待される。

史跡土佐国分寺跡については、史跡等現状変更に伴う発掘調査に加えて、昭和六十二年から四次にわたる学術調査が行われ、寺域を画する土塁状遺構・僧坊跡とみられる掘立柱建物跡群・金堂跡の地業痕などが確認されている。調査から、同寺院跡は五〇〇四方の寺域を持つ東大寺式の伽藍配置で、金堂は現在の金堂の真下に埋もれていること等が判明した。講堂の所在範囲については未調査ではあるが、金堂跡北側の一画に存在するものと考えられる。また、寺域内からは七世紀後半期に形成された掘立柱建物跡等が検出されており、国分寺に先行する建物等の施設の存在が明らかである。この建物跡の性格の解明や、国分寺の伽藍配置の究明が今後の課題である。

最後に、野中廃寺跡であるが、昭和三十八・平成三年に調査が行われている。平成三年の調査では、字鐘突の公園建設地から、掘込地業を伴う基壇遺構が検出され、平安時代前半の瓦類・土器等が出土した。瓦類のなかには高知市・秦泉寺廃寺跡出土瓦と同型の忍冬八葉蓮華文軒丸瓦が確認されている。伽藍構成については不明確ではあるが、ＪＲ線路を挟んで北側に同様な基壇状地形が残されており、主要伽藍の一部と考えられる。同寺院跡は、平安時代前半に成立した寺院として重要である。

（やまもとてつや　高知県埋蔵文化財センター）

比江廃寺跡の建物跡

第12回写真コンテスト・高知を撮る入賞作品

高知を撮る

芳春の頃

岸上　昭仁

郷土出身の直木賞作家田岡典夫さんは「竹斗」と号した。「竹の柄杓」という意味を、土佐の酒客が愛用した「ちく・と一杯」に引っ掛けた酒落であるという。

もっとも、ご本人は、師の田中貢太郎のような酒豪ではなくて、下戸に近かったらしい。

●

「ちくと一杯」は、独り「一献傾ける」とか、「一献いかが」と酒を勧めたり、酒に誘ったりする場合の常套語であった。左党同士ならば、目が合ったとたんに、「ちくと」と呟くだけでことが足りた。

「ちくと」は本来「少し」の意であるが、「おおいに、うんと」という逆の意味もあって「ちくと」厄介である。

土佐は酒国、「一献」が「少々」でおさまることはまずあり得ない。「少々」は「升々」で「二升」であると、他県人は驚く。

そもそも「一献」とはどれ位の量を指すのか？また、その由来は？　肝臓の専門家水戸廸郎博士は言う。

●

三献（さんこん）

風俗歳時記

――ことわざ辞典には、「酒は三献に限る」とある。三献は中世ころからの接客の礼法で、茶懐石にその名残がある。最初に汁と御飯を少し食べて、ここで招待主が一献をすすめる。一献は大・中・小の杯で一杯づつ三度繰り返し飲むことである。この一献で「お向かい」といわれる一種の口取りを食べ終わる。ついで煮物が出るとまた一献、最後に八寸に盛った海山の幸の肴で一献、合計九杯の酒をすすめる。三献の酒の量はせいぜい二合である。また適量のアルコールとともに糖質、タンパク、ビタミン類などの栄養分を摂取することになる。この作法はアルコールの代謝の主役を担う肝臓にとっても、中枢神経系に及ぼす報酬効果の点から見ても、まことに健康的かつ合理的な飲み方である。生活の知恵の最たるものといえよう。――

（『沈黙の臓器と語る』）

（朴）

化粧水「ポポコロン」誕生

片岡千歳

ヘチマの化粧水を頂いた。

「自家製よ」と片木さん。もう十年くらい前のこと。もともと百姓生まれの私は、なんでも植えてみたい、育ててみたい方で、ヘチマ水を私もつくってみようと、春を待ちかねた。

ポット植えのヘチマの苗を二本買って、軒下の土を五十センチ四方ばかり耕して植えた。つるが伸びたら、二階の窓の柵に、ビニール紐の手を結んでやるのに好都合だと思った。ながいヘチマがいくつも、窓の下にぶら下がっている風景も楽しいにちがいない。いま植えたばかりで、次々と想像が広がって楽しかった。

最初の年は、私のなんでもトライする心に神様が応援して下さったか、よく出来て、だいたい三リットルほどの収穫があった。実も立派なのが二個採れて、昔、たくさん味噌をつくっていた頃の、味噌ハンドに水をはって、ヘチマを漬け皮が腐ってきたら取り出し、きれいな水でよく洗い、種も取り除けた。

お風呂で体を洗うのに売っている、白い繊維のヘチマは、漂白しているものとばかり思っていた。自分でやってみて、ヘチマの緑の下に、こんなにも白い、そしてしなやかで強い繊維を隠し持っていることを発見した。三月末に苗を植え、半年あまり朝ごとに水をやり、つるが伸びた、黄色の花が咲いたと、楽しませてもらい、なお、ささやかながらヘチマの実の不思議を発見。これだけでも充分私はヘチマを植えたことに満足した。

肝心のヘチマ水を採る。

ヘチマの近くに杭を打って、洗浄した瓶を（二リットルくらいの）倒れないように固定する。ヘチマの根もとから、一メートルくらいのところでつるを切って、根もとのほうのつるを瓶に差し入れる。雨水が入らないように、ビニール袋を被せて、風で飛ばされないように縛っておく。ヘチマは葉がなくても、まだ生きているので、ときどき根もとに水をやることを忘れてはならない。やりすぎると水っぽいヘチマ水になるかもしれない。これは私の懸念するところ。

ある人は、つるを切って、空に伸びている花も実もついている方のつるを、瓶に差し込んで失敗した。花や実になるものに、化粧水になる成分があると思うが、それを生み出すのは、土の中にある根であることを、うっかり見落としてしまう。

私の生活のなかにも、似たようなことがありはしないか。

毎朝、瓶を透かして、水の溜まり具合を確かめるのも楽しい。一週間くらいしたら、瓶にいっぱいになならなくても、近くの薬局で、化粧水に加工してもらう。

友人の杉村さんは、薬品を買って、自分で加工していると言う。私は薬によわく、自信がないので、仕上げの加工は、いつも薬局に頼っている。したがって純粋自家製とは言いがたい。

「ポポコロン」誕生。

子供のころ「ヘチマコロン」という化粧品を、婦人雑誌の広告で見知っていた。私の本業の「タンポポ書店」の―ポポと―コロンの可愛いところを繋いで「ポポコロン」とは、私のつくったヘチマ化粧水。ついでにネーミングも私。私の周りでは「ポポコロン」と言う名称も、かなり浸透していて「ポポコロンまたちょうだいね」などと昔からあるもののように使われて、立派に市民権を

得ている。

加工した日を瓶に書いておく。

昨年の瓶には平成八年九月十六日とある。実を収穫するには十月半ばまで、つるを切らずに実が成熟するのを待たなければならない。むろん春、植えた時期によっても、多少異なる。風呂用のヘチマを楽しみにしている人もいるけれど、実が不要の時は、つるにまだ勢いのあるうちに、つるを切って水を採った方が、収量が多いことに気がついた。

効能。

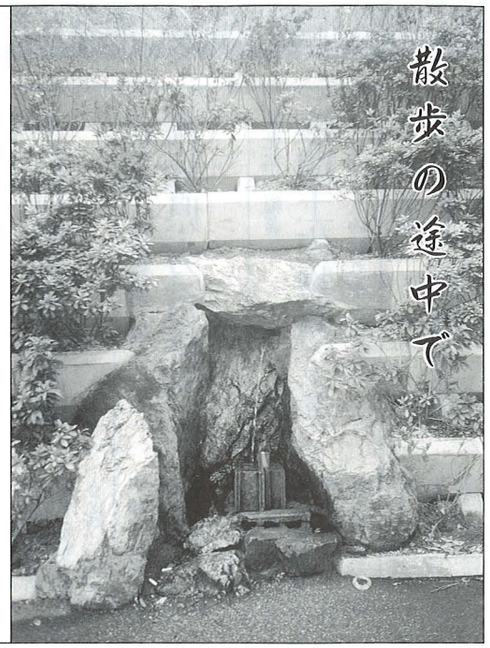
よくは分からない。科学的に比較実験をしていないので、述べることは出来ない。ただ自分で育てつくる楽しさと、充実感は、化粧水の成分にプラスされていると信じたい。

一昨年だったか、春苗を植えると、翌朝、影も形も無くなっていた。不思議に思いながら、また苗を買い植え。七回植え換えた。

西岡さんの診断で、だんご虫のしわざと分かり、薬品を貰った。一発で成功。でも単純に喜べない成功でもあった。

（かたおかちとせ・古書店経営）

散歩の途中で



わき水は市域周辺のあちこちにあり、それほど珍らしくはないが、ここはひょっとするとニューフェースかもしれない。場所は新しくできた六泉寺トンネルの北入口。花壇状に造られたよう壁の下部にある。写真を撮っている間に三人のご婦人が、かわりばんこにポリ容器に水を満たしていた。

聴くところによると、米の炊き水、コーヒー、お茶に良いとのこと。特にコーヒーにはお薦めだそうだ。

風伯

常識

宮沢賢治の悟りの世界では、雨ニモ風雪ニモ夏ノ暑サニモ負ケナイのであるが、我々は冷暖房はもちろん、味噌ト少シノ野菜どころか、季節とは無関係に果物でも野菜でも食べ放題である。そして、こうした生活を快適と感じ、現代科学文明の恩恵だと信じ込んでいる。

しかし、澄んだ空気と水のもとで、寒暑にも逆らわず、適度の労働と粗食に耐えるという生活は、何千万年もの人類の歴史のなかで繰り返されてきたものであり、我々の身体機能もそれに合うように形成されてきているのではないか、百年やそこらで簡単に変わるものではあるまい。

かといって今の生活を、かつての状態に戻すことなど想像すら出来ない。

いくらストレスを増幅させようが母なる青い地球を蝕もうが一向にお構いなしだ。

「常識は最も普遍的な宗教だ」と言った友人がいたが、一度どっぷり漬かってしまえばそれが常識となり正しいと信じてしまうのかも知れない。

最近の政治家や官僚の世界では、金権派閥が跋扈したもとで、倫理観をなくし、利権漁りや天下りなどに血眼になっているようにうかがえる。いずれも国民のためにという精神は、いつの間にか私に読み換えられている。

さらに官官接待のためのカラ出張やカラ雇用、食糧費の不正支出とくれば、公金意識など、どこ吹く風だ。この世界には別の〝普遍的な宗教〟があるようだ。（かむ）

高知市文化振興事業団　出版案内

外崎光広　著
土佐自由民権運動史

著者の四十年に及ぶ研究を集大成。新資料による知見も盛り込みながら、土佐自由民権運動の全容を通史として明らかにした。
A5判・上製本・四二四頁　定価二、八〇〇円

外崎光広　編
土佐自由民権資料集

土佐自由民権に関する基本的資料百十余点を事件別に分類・収録。原資料によって各々の事件の実態が把握できるようにした。
A5判・三四四頁　定価三、〇九〇円

土居重俊・浜田数義　編
高知県方言辞典

古語から現代語にいたる土佐言葉一万四、七〇〇余の意味、用例、使用地点等を明示、注釈も加えた土佐方言唯一最大の辞書。
A5判・上製本・七三六頁　定価六、一八〇円

依光裕　編著
珍聞土佐物語（上巻）
——五十人の語り部たち

土佐の山や海辺の村の囲炉裏端で古老が語った地元の伝説や小咄の数々。ここでは地域別に二十名の語り部の百三十話を収録。
四六判・三九二頁　定価一、六〇〇円

依光裕　編著
珍聞土佐物語（下巻）
——五十人の語り部たち

県下各地の様々な語り部三十一名から寄せられた百二十話を採録。親から子へ、孫へ語り継ぎたい「ふるさと」がここにある。
四六判・四〇八頁　定価一、六〇〇円

岡林清水　著
高知県文学散歩

高知県の文学を地域に即して紹介、その舞台、歴史、作家の足跡等を訪ねて歩く〝旅のなかの文学史〟ともいえる文学案内。
四六判・二七八頁　定価一、八〇〇円

山本大　著
幕末の青春
——坂本龍馬の生涯

激動の幕末期を駆け抜けた坂本龍馬の一生を、史実に基づき分かりやすく描いた、子供から大人まで親しめる屈指の龍馬伝。
四六判・一六八頁　定価一、二〇〇円

藤本稔子　著
思いっきりみとめて子育て
——子育て　個育て　親育ち

保育者としての長い経験からみた子どもたちのいきいきとした姿。その豊かに育っていく過程を描きながら子育てを考える。
四六判・三五二頁　定価一、六〇〇円

高知市文化振興事業団　編
わがまち百景
——21世紀に伝えたい高知市の風景

高知市の誇りとして残したい風景を百カ所選定し、百人の随想と写真で紹介。様々な視点からの素晴らしい高知が実感できる。
A5変型判・二二四頁　定価一、二〇〇円

高知市文化振興事業団　編
高知のエスプリ
——ふるさとの未来（あす）を考える

県内のオピニオン・リーダー五十人が、各々高知へのあつい思いを語る。「文化高知」巻頭文からカットとともに収録した。
A5判・一六〇頁　定価一、二〇〇円

高知の文化を考える会　編
高知の文化を考える

文化について多方面から検討、豊かで個性的な市民主体の高知の文化をどうつくり発展させていくかを、市民的立場で考える。
A5判・一八八頁　定価一、二〇〇円

清水孝之　著
中山高陽

土佐の生んだ江戸文人画の祖中山高陽の業績を明らかにした労作。資料として未発表のものを含む書簡集・年譜等を収録した。
A5判・上製本・三六二頁　定価三、九一四円

筒井広道　著
画帳の歳月

高知画壇の重鎮の、美と画業についての随想集。県展の知られざる内情、肩のこらない絵画論等、興味尽きない美術への誘い。
A5変型判・上製本・二五六頁　定価二、〇〇〇円

高木啓夫　著
土佐の芸能
——高知県の民俗芸能

現存する土佐の民俗芸能をくまなく収集し体系化。それぞれを神楽・獅子舞・地芝居・太鼓踊り・民謡等に分類し、詳説した。
B5変型判・上製本・三四六頁　定価四、九四四円

土居重俊　監修
高知市文化振興事業団　編
土佐弁　土佐日記

紀貫之の名著『土佐日記』を、現代とさことばでつづる。古典を身近なものにするとともに、土佐弁にも親しめる楽しい本。B6判・上製本・一三〇頁　定価一、三〇〇円

高知県緑の環境会議　森林研究会　編
高知の森林

高知の代表的な山と森林をつぶさに探訪し、残されている貴重な自然や植生、森林と人とのかかわりの歴史、現地への道のり等を紹介。B5変形・二二八頁　定価二、五〇〇円

財団法人　高知市文化振興事業団　〒780 高知市本町5丁目2番3号　TEL(0888)73-4365　郵便振替01680-5-14869